

原爆のおそろしさ

糸魚川中学校 2年2組 山本 凜太郎

僕は広島派遣に参加して学んだことは、核、戦争の恐ろしさです。77年前の8月6日、8時15分、広島に原爆が落とされました。そして約14万人もの命が一瞬にして奪われました。僕は、当時9歳小学校3年生で被爆をされた波田保子さんのお話を聞いてきました。

当時、波田さんは集団疎開をしていました。疎開先では、とても楽な生活とは言えず、食べるものが少なく毎日喧嘩が起きていて不健康、それにお風呂は2週間に1回で、虫がわいて暑くて辛くてとても大変だったと話していました。

そして広島に原爆が落ちた日には、地震のような大きな揺れがあり、激しく光ったそうです。波田さんは近くにあった竹やぶに避難し、もくもくと上がるキノコ雲を見ました。お母さんとお父さんが迎えに来るまでずっと待っていました。迎えに来たとき、原爆によってお父さんの姿が変わってしまっていて、すぐに近寄って行けなかったと話していました。ですが、お母さんから「死ぬ時は家族3人一緒に死にたいと、お父さんが言っていたんだよ。」と聞くと波田さんはお父さんに近づき、話をするのができたと話していました。そして家族の元に帰っても楽な生活ではなく、仕事を朝から晩までしていたそうです。

アメリカは日本を実験台にして、原爆を落とす練習を行っていました。その理由は、原爆を1つ作るのに莫大な費用がかかってしまうので、失敗は許されなかったからです。（長岡にも爆弾が落ちています。）原爆は上空600メートルで爆発しました。その理由は、地上で爆発するよりも600メートル上空で爆

発させた方が被爆範囲が広がったからだそうです。爆発した時の熱は約 1,500 度にも達し、人間の影が壁に張り付いてしまいました。その人間の影が張り付いている実物を資料館で見ました。そこでは、当時のままのお弁当箱や道路に倒れ込んでいる人の写真、たくさんの頭蓋骨の写真など胸が苦しくなってしまうものがたくさん展示されていました。

広島派遣に参加させてもらったので、これからは、この経験をみんなに伝え、戦争のない世界にして二度と核を使用せず、広島や長崎のように辛く、苦しい思いをする人を出してはならないと強く思いました。そして核の恐ろしさを実際に知ることができたので、これからは大勢の友達、先生、家族などに教えていきたいです。そして核使用の反対を訴えていかなければならないと思いました。
